

日本財団「海と日本プロジェクト2017サポートプログラム」助成事業

**「西の堺 東の酒田」湊町復活（リバイバル）事業
実施報告書**

**「海の日」記念事業実行委員会
（山形県酒田市）**



【概要】

- ・酒田港の概要
- ・日本財団助成事業(西の堺 東の酒田湊町復活事業)

【個別事業】

1. 酒田港 海のお仕事探検～海と日本PROJECT～
2. 「西の堺 東の酒田」海の歴史探検～海と日本PROJECT～
3. 大浜海岸ビーチイベント「酒田ビッグビーチフェスタ2017」～海と日本PROJECT～

成果(全体)



酒田港の概要①



象潟 I.C.

至 秋田

鳥海山
(日本百名山)

酒田みなと I.C.

日本海東北
自動車道

至 新潟

北港地区

外港地区

酒田市役所

日本海

本港地区

酒田港の概要②

酒田港は山形県を縦貫する最上川の河口に位置する港で、古くから日本海側沿岸や内陸河川交通の要衝として発達、1672年の河村瑞賢により西回り航路が開拓されると酒田港はさらに栄え、江戸期嘉永・安政年間のことには、多くの豪商が軒を並べ、酒田港は全盛を迎えました。

その後、河川の氾濫や流出土砂の影響により、船舶の大型化に対応できず、次第に衰退しましたが、航路改良・治水工事などの先人たちの努力により悪条件を克服しました。

さらに、1970年代からの北港地区の開発、2000年代の国際ターミナルの供用と酒田港は時代に対応した開発、利用振興を進めています。



江戸期活躍した北前船
(写真は千石船を
1/2モデルで再現したもの)
【日和山公園】



明治初期に建てられ、
米の倉庫として現在も現役の
『山居倉庫』
倉庫の一部は現在、
観光施設(夢の倶楽)に



日本財団助成事業（西の堺 東の酒田湊町復活事業）

平成29年8月1日（火）～平成30年3月23日（金）にかけて、3事業を山形県酒田市内および大阪府堺市で実施。延べ参加者数約1,600名

【本事業の目的】

室町時代から江戸時代にかけて、酒田や大坂（現在の大阪）の堺では商人たちが自治的な都市運営を行い、中世の自治都市として繁栄を極め、『西の堺 東の酒田』と謳われ、いずれも日本を代表する湊町でした。

これらの歴史や伝統の背景にあった「海との多様なつながり」について、その恩恵や価値を現代において改めて認識するとともに、今後これらの財産を次の世代を担う子供たちに伝え引き継いでいくことや新たな魅力や付加価値を創造することを目的に各種事業を実施しました。



酒田では、北前船で運ばれた関西好みの顔立ちをした‘京雛’の雛人形が今も大切に保存されている。

北前船の航路



江戸時代、河村瑞賢が西回り航路を確立。北前船による交易の隆盛により、酒田は堺や博多と同様、自治港湾都市として発展した。

1. 酒田港 海のお仕事探検 ～海と日本PROJECT～

(目的)

酒田港周辺における海の仕事に関する現場体験を実施し、海に関する興味・関心を高めることで将来の海事人材の確保に貢献することを目的に開催しました。(5コースを準備)

(開催日)

平成29年8月1日(火)

(内容)

酒田市内の高校生1名が参加し、海上保安庁第二管区海上保安本部酒田海上保安部で海上保安官の業務内容についての学習後、訓練体験や操船体験等の実践的な体験を実施しました。

(参加者数)

高校生1名

(企画・運営協力)NPO法人山形県リサイクルポート情報センター



船の係留に必要な
ロープ結びの講習



船上での実習の様子



救護活動の様子

【成果】

- ・参加者が1名のみでしたが、これが功を奏し、内容を参加者に合わせて体験の時間を増やすこととなり、より具体的に将来のイメージを掴んでもらうことができました。参加者からも就職に向けた前向きな感想を聞くことができ、海に関わる仕事を就職先の選択肢に加えることができました。
- ・受け入れ側の酒田海上保安部にとっても、意欲の高い学生を紹介してもらうことができ、就業時間を割いて対応する価値があったと評価いただきました。今回、実施できなかった4コースの受入企業も含め、今後も同様の事業に対して協力いただけることになっており、今後の土台作りができました。

【反省点】

- ・中学校への事前説明では、先生達から直ぐに定員オーバーが予想されるとの見立てであったため、募集状況の確認がおろそかになってしまいました。募集締切後に応募が少ないことが分かり、中学校や高校の先生から直接声かけをしてもらいましたが、他の行事の日程と重なるなどで結局、追加の参加者を確保できませんでした。今後の開催に向けて、日程の設定や内容について関係者と検討していきたい。



2. 「西の堺 東の酒田」 海の歴史探検

(目的)

山形県庄内地域の自然・伝統・文化等を、酒田市や同じく古くからの湊町である堺市の次世代の方々に、両地域でのフィールドワークや料理実習を通じて海への好奇心を持ち、「海とのつながり」を深く考えるきっかけを提供することを目的に開催しました。

(開催日)

平成30年3月15日(木)～16日(金)＜堺市＞、3月22日(木)～23日(金)＜酒田市＞

※酒田市にて事前講習会を2月27日(火)に開催

(内容)

北前船交易が食文化に与えた影響などを中心に、フィールドワークとして、堺市では昆布や刃物について、酒田市では料亭文化などについて体験しました。調理メニューは鯛を主食材として、押し寿司やうしお汁など両地域の調理法や味付けを実習し、共通点や異なる点を学びました。

(参加者数)

延べ103名

(企画・運営協力)テレビユー山形、庄内浜文化伝道師協会



お互いの地域について学ぶ
座学も実施し理解を深めました



普段目にしないアカモクなどを使った
調理実習の様子



両地域を学んだ学生を
「堺・酒田 食文化インストラクター」に認定

【成果】

- ・堺および酒田の歴史的背景が、北前船交易によって繋がりのあるものだったことがこの事業を通じて両地域の学生に伝えることができ、離れた地域がより身近な存在であることを感じてもらうことができました。
- ・それぞれ調理師と管理栄養士を目指す学生の相互交流となりましたが、味付けの違いや使ったことのない食材を知ることができ、将来使える知識の幅を増やすことができたと考えます。
- ・海と日本プロジェクトの山形事務局であるテレビユー山形の協力を得られたことにより、都道府県事務局がない大阪において、海と日本プロジェクトを周知することができました。

【反省点】

- ・将来の庄内浜文化伝道師を養成することも、本事業の目的の1つでしたが、今回は認定を受けるまでには至りませんでした。今後の様々な活動のなかで関わり合いを持ち、実現に向けて取り組んでいきたいと思えます。



3. 酒田ビッグビーチフェスタ2017

(目的)

広さや砂の質、市街地からの距離など、好条件は揃っているもののこれまで利用されることの少なかった大浜海岸を活用して、海の賑わい創出と良好な海浜環境を保全・維持していくための意識醸成・啓発を目的に開催しました。

(開催日)

平成29年8月1日(火)

(内容)

当日はビーチバレーボール大会の他、はだしになって汗を流し家族愛を深めることを目的とした「家族対抗はだし運動会」、万が一に備えて救急救命方法を学ぶ「いのちの教室」、きれいな海を守っていくためのクリーンアップ活動などを実施しました。

(参加者数)

約1,500名

(企画・運営協力)大浜海岸イベント実行委員会



新種目「ビーチ雪合戦」では、子どもだけでなく大人も熱中！



波の穏やかな立地を活かし、シーカヤック乗船体験も実施



大切な人を守るために真剣に取り組んだ「いのちの教室」

3. 酒田ビッグビーチフェスタ2017（成果と反省点）

【成果】

- ・ビーチバレーボール大会には多くの方から参加いただき、実施に協力いただいた山形県ビーチバレーボール連盟からも、今後の継続開催したい意向がありました。
- ・家族対抗はだし運動会では、家族で楽しめる運動会を通じて、家族愛を深め、ビーチを身近に感じ、海の大切さを再認識する機会となりました。
- ・トップアスリートとの交流イベントでは、ビーチバレーボール大会の優勝チームとのエキシビジョンマッチを行うなど、参加者にとって間近で触れ合える機会となりました。
- ・シーカヤックの乗船体験では、当日受付も可能としたことで、気軽に体験してもらうことができました。海で遊ぶことの楽しさを味わっていただくとともに、酒田は川を經由して酒田港を一周できる全国でも珍しい地域であることをPRできました。
- ・大浜海岸クリーンアップでは、来場者、スタッフなど参加者全員で海岸清掃を実施し、参加者一人一人が海浜美化を継続し、今後もはだしで活動できる大浜海岸を維持していくことを参加者全員で共有しました。

【反省点】

- ・多くの参加を見込んでいた幼児を対象とする他イベントと日程が重なってしまい、参加者の確保が十分にできなかった。対象を広げ、小学生への周知も強化していきたい。
- ・内容調整に時間を要し、ポスターやチラシの配布も計画より遅れてしまいました。次回開催の際には、大まかな内容が固まった段階で周知を図りたい。



【成果】

- ・当初の参加者数の目標を達成することはできませんでしたが、酒田市内外から多くの方々に参加いただくことができ、「海とのつながり」を考える機会を提供することができました。
- ・堺の学生との相互交流を実現できたことや、東京のNPO関係者との連携で事業を実施できたことにより、様々なアイデアを反映させて事業に広がりを持たせることができました。
- ・学校やNPO団体だけでなく、地元企業やボランティア団体等と協力して事業を行うことができ、今後の継続した事業展開の土台を作ることができました。

【反省点】

- ・イベントの周知では、ポスターやチラシのほか、インターネットや新聞、ラジオなどでもお知らせしたが、結果としてまだ不足していたと感じる。対象者個人へのチラシ配布だけでなく、直接呼びかける方法なども検討していきたい。

